

所内研修③指導主事講話「東日本大震災から考える」

6月1日(月)に所内研修として、上原義仁指導主事を講師に、東日本大震災に伴う津波への対応と震災復興の現場の様子から、防災教育の在り方を考えることをねらいとして講話を実施しました。

震災当日、沖縄県も津波警報が発令され、その対応をどのように勤務校で行ったのか、更に翌日、子ども達に向けた特別授業実施の様子、震災後、海岸に近い学校に勤務した際の津波防災に関する避難訓練の様子、震災から2年後に家族で被災地を訪れ、「語りベタクシー」で各地を周り復興の様子を撮った写真と、当時の事実と照らし合わせながらの45分の講話は、災害に際して教員のなすべきことを考えさせられるものとなりました。

【講話の概要】

- 1 はじめに
- 2 2011年3月11日 東日本大震災発生日
 - (1) 津波警報発令、情報入手は？ (2) 避難の状況
 - (3) 児童生徒下校
- 3 特別授業「東日本大震災」
 - (1) 防災教育、今しかない。
 - (2) 3月11日の行動と被災地の状況や被災者のことばから
- 4 被災地を巡って
 - (1) 被災地の今
 - ① 交通の復旧の状況 ② 仮設商店街 ③ 語り部タクシー
 - (2) 被災時の出来事(カギを握っていたのは誰?)
 - ① 津波の被害 ② 南三陸町防災庁舎 ③ 大川小学校
 - ④ 七十七銀行女川支店 ⑤ 女川町立病院
- 5 前任校の対策
 - (1) 防災教育 (2) 避難訓練 (3) 危機管理
- 6 地震・津波・災害・・・、教員として・・・
 - (1) 防災教育・訓練
 - (2) 災害時の対応に向けた計画・準備・広報
 - (3) 災害後の対応
 - 学校は避難所 ○ 私たち教師の行動は？



写真1 研修の様子



写真2 研修を終えて



教育研究員の感想(研修日誌から)

東日本大震災を受けて自分にできることは何かと、特別授業を行ったり、現地を訪れたり義仁指導主事の行動力に頭が下がる思いでした。お話の中で改めて当時の被災地の写真等を見ると、当時はテレビや新聞等の報道を見て衝撃を受け、胸が痛み、様々なことを思う日々が続いていたことを思い出しましたが、時が経つにつれてあの震災への思いが少しずつ薄れていた自分に気づきました。しかし、義仁指導主事のお話から、常に自分のこととして受け止め、震災の記憶を風化させずに、防災について、自分の命を守ることにについて考えながら子どもたちに伝えていきたいと思うことができました。また、学校が避難場所となった場合、教師である私たちがその場所を守っていかなければならないということにも気づかされ、そのことをしっかり自覚し、家族にも理解を得ておかなければならないと感じました。私が所属する糸満南幼稚園も津波の危険と隣り合わせなので、備えをしっかりとしていきたいと思えます。(金城さくら)

講話を聞いて、災害の恐ろしさをあらためて実感しました。私たちは、あの災害から何を学び、何にどう取り組んでいるのだろうか？と考えさせられました。どんどんうすれていく記憶と関心。私たち教師は、児童の命を守るという点から「何にどう取り組むか」を考えることはとても重要だと感じています。避難訓練等も時間を意識させたり、震災当時の震災地域の状況と比較想定しながら訓練をしたり、亡くなった人と生き残った人の判断や取り組み、災害に対する考え方など多方面からの比較も重要かと感じました。

今回、上原指導主事が被災地を訪ねられた貴重な映像やお話をうかがえてニュースなどでは入らない生の情報に心打たれました。

沖縄でも地震や津波に関する対応は重要だと考えています。

(大城厚)

講話を聞き、改めて考えたことが3つあります。1つ目は、危機管理意識の強化です。普段から最悪の状況を想定し、なるべく被害を最小限に抑えられるように備えておくことです。さらに、「自分の身は自分で守る」という視点を持たせ、訓練で鍛えたことをもとに、臨機応変に行動することも忘れてはいけないことを東北地震から学びました。2つ目は、他の学校や地域、全国、世界との連携や情報共有化です。情報化社会の中で便利になったものの、必要な情報かどうかを見極め、どう対応するかはその場やその時に瞬時に判断しなくてははいけません。普段から交流を深め、意思疎通や連携がとれるような協力体制を確立しておかなければはいけません。3つ目は、復興の力や人と人との結びつきの大切さです。物資やボランティアなどの支援、人と人とのつながりや結びつきが重視され、かかわりが強調されていると思います。

教員として、親として、地域の一員として何ができるか、備えるべきことは何かを子どもたちと共に考え、安全・防災に対する心構えをもちたいと思います。

(長門照乃)

東日本大震災の話になるといつも阿嘉島にいた時の様子を思い出します。テレビを見たときの衝撃、避難場所になっている学校での対応、自宅に帰っていく人々…それまでは、津波を人ごとに感じ、危機意識も薄かった私にとって災害についてしっかり考えていかなければいけないと感じさせる出来事でした。一番怖いと感じたのは、大川小学校と七十七銀行女川支店の話でした。リーダーや指導的立場の人の判断で命が左右されるのは本当に恐ろしいと思いました。また、正しい判断と決断力の必要さとそれを培うために普段から危機意識を持つことや正しい情報を収集することの必要さを感じました。

まとめが3つあり、その中でも「危機感を持つ、真剣に考える」というのが一番必要だと思いました。警報が無くなった時、安心するだけで学校現場は終わりがちだと思います。10月に現場に戻った時には、避難訓練のたびに、自分の対応を振り返り、次にしっかりと繋がるよう指導したいと思います。

(具志堅智美)

震災後、義仁先生がすぐに特設授業を実施したことを自分だったらどうしていただろうかと考えました。その時に勤務していた学校自体が高台にあったので、津波に関することを教えることはしなかったのではと反省しています。将来、子どもたちがどこに住むか分からないので、この時点で教えておくべきことだったと思いました。

被災地を巡った話では、そのとき、その瞬間の判断で生死が分かれたということで、生徒一人一人が主体的に行動できるようにしておくべきだと強く感じました。また、その力を身につけさせる場は授業にあるということもさらに考えさせられました。

学校が避難場所になるということについても教師という立場からみれば、地域の人を受け入れる側になるので、学校ができることを職員で話す場が必要だと感じました。

最後に、「備えあれば憂いなし」ということを常に考えて行動できるようにしていきたいし、そのように考えられる生徒を育てていきたいと思います。今日は、貴重なお話をありがとうございました。

(古屋誠一)